



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3200号 2016.8.21 発行

<記者の目>大阪人権博物館 閉館の危機=戸田栄 (大阪編集局)



毎日新聞 2016年8月19日
閉館の瀬戸際にある大阪人権博物館。同館ホームページには支援の方法が書かれている。27日午後2時から同館で支援集会も行われる

負の歴史、気づきの場

人権問題の資料には、両刃の剣となるものが多数ある。例えば、部落問題では古地図。被差別部落の位置が記され、そこから専門家は部落の歴史的位置づけを読み解く。しかし、所在地を明かすから悪用する人も出てくる。こういう取り扱いが難しい資料の収集・保存、展示・公開に重要な役割を果たしてきたのが、1985年に国内初の人権問題の博物館として、財団法人の運営で開館した「大阪人権博物館」(リバティおおさか、大阪市浪速区)だ。もともと大阪府・市が公営博物館と見ていいほどの支援をしてきたが、姿勢を一転させ、現在は大阪市が敷地返還訴訟まで起こし、閉館の瀬戸際に追い込まれている。私は今後も同館が果たすべき役割は大きいと考えており、大阪市に再検討を求めたい。

各地の部落の所在地を集めた本が出版され、企業などが少なからず購入する時代があった。入社志望者の本籍地等と照合し、就職差別に使われた。興信所なども買入れ、結婚時の差別に悪用した。この種の本は部落地名総鑑と呼ばれるが、75年以後の廃絶運動の結果、ほぼ姿を消していた。しかし、ここ数年、インターネット上で類似資料を公開する動きが出て出版も計画され、部落解放同盟などが訴訟を起こし、既に横浜地裁などが出版差し止めやホームページ削除の仮処分を決定している。また、このような憂慮すべき状況を背景に、自公民3党は前通常国会に部落差別解消法案を共同提出して継続審議となっている。

同館では、専門家による人権問題の研究会が頻繁に開かれている。先月の朝鮮半島の被差別民の研究会では、この問題での戦前の人類学者の収集資料について討議された。もう存在しない集落の写真など貴重なものも多いが、体格等のデータ収集まで行っており、「誤った発想に基づく調査で、発表は慎重に」と注文が来た。人権問題の資料には、こうした議論が欠かせない。

同館では、専門家による人権問題の研究会が頻繁に開かれている。先月の朝鮮半島の被差別民の研究会では、この問題での戦前の人類学者の収集資料について討議された。もう存在しない集落の写真など貴重なものも多いが、体格等のデータ収集まで行っており、「誤った発想に基づく調査で、発表は慎重に」と注文が来た。人権問題の資料には、こうした議論が欠かせない。

差別と偏見研究、資料総数3万点

ここまで部落問題を中心に例示してきたが、人権の総合博物館として在日コリアン、アイヌ民族、沖縄問題、ハンセン病、エイズ、水俣病など公害問題の資料を収集してきた。

総数は3万点に及ぶ。

民主主義社会確立のため、差別や偏見を研究してなくすことが重要なのは当然だが、入門者に資料はどのような意味を持つのだろうか。朝治武館長は「教科書で知る歴史は政治史であり、英雄たちの物語がほとんどです。しかし、人間社会は失敗もし、発展の中にゆがみを生じてきた。そんな負の歴史を同時に負っています。ここは、その気づきの場です」と語る。気づきは社会や個人に改善を促し、気づかぬことを恐れる慎重さも兼ね備えさせるのではないか。

差別の罪を伝える資料ばかりではない。近世社会は、一定の被差別民に特定の職種を担わせていた。皮革関係はその一つだが、同館では伝統的なめし技術を紹介する。皮革は履物などの生活用品のほか、武具や太鼓、三味線などに欠かせない。日本の伝統技術には部落で育まれた技が重要なものも多く、現代の生活や文化へとつながっている。部落の産業や文化面での再評価を促すものといえる。

同館はカースト制度など国外の差別問題にも目を向けてきた。アジアで、日本は伝統的差別の克服にいち早く取り組んできた。海外の差別に苦しむ人々には、その歩みに学びたいという切実な声もある。

これほどの博物館は全国的にほとんどなく、閉館はあまりに惜しい。ネット時代で、誰もが情報を発信できる時代だからこそ、気軽に足を運んで学べる場としても貴重だ。

敷地返還求め、大阪市が提訴

橋下徹氏が大阪府知事に就任後（その後、大阪市長に転身し昨年退任）、同館の苦境が始まる。2013年3月末、府市は展示内容などを理由に補助金を全廃した。学芸員や職員の削減、サポーターらの支援でなんとか持ちこたえたが、次に市は無償貸与してきた同館敷地の年約3000万円に及ぶ賃料を要求（建物は同館所有）。払えずにいと、15年7月、大阪地裁に提訴し、今も審理が続いている。

最後に、その敷地の来歴を紹介しておきたい。同館のある地域は江戸時代から昭和にかけ、西日本の皮革流通の中心地で、野間宏の小説「青年の環」の舞台ともなった。地元有志らが土地の大半を市に寄付し、地域の子の小学校設立を求めた。この学校の移転後、跡地利用にふさわしいとして同館が設けられた。

同館の現状にみられるような近年の人権行政・教育の後退が、ヘイトスピーチなどが横行する問題の一因になっていると思う。人権擁護を根幹に据えず、日本社会はどこへ向かおうというのか。

多磨全生園への理解深めて 入所者自治会など来月から講座



東京新聞 2016年8月19日
人権の森構想が進められている多磨全生園の正門付近＝東村山市で

国立ハンセン病療養所「多磨全生園」（東村山市青葉町）の入所者自治会と市などは9月～来年1月、同園について詳しく学ぶ講座を、園に隣接する国立ハンセン病資料館などで開く。

園内には寮や神社、納骨堂などのほか、入所者が長年かけて育ててきた3万本の樹木がある。国による不当な強制隔離政策で受けた差別や偏見、その後の人権回復の歩みといった歴史を後世に伝えるため、入所者自治会は園全体を「人権の森」として将来に引き継ぐ構想を打ち出している。

入所者自治会と市はこれまで、構想実現に向けた普及啓発活動の一環として、市民らに

入所者自治会と市はこれまで、構想実現に向けた普及啓発活動の一環として、市民らに

よる園内の清掃などを催してきた。参加者らから「ハンセン病や多磨全生園についてもっと詳しく知りたい」との声が多く寄せられ、初めて講座を実施することにした。

講座は9月24日、10月15日、11月27日、12月10日、1月14日の5回。初回はガイダンスや資料館見学をし、2、3回目以降は、市と園のかかわりや園の歴史、人権の森構想に関する講義のほか、園内で緑や生物、史跡などを見学する。12月10日は小平市のルネこだいらで患者の講演を聴き、最終回はそれぞれが学んだことを発表して意見交換する。

応募資格は、5回のうち4回以上参加できる高校生以上で、定員20人（応募者多数の場合は抽選）。所定の用紙に必要事項を記入して市企画政策課に持参または郵送する。市ホームページからも申し込める。締め切りは31日（必着）。問い合わせは同課＝電042（393）5111＝へ。（萩原誠）

LGBT 当たり前の存在 学校での学び 大切 中日新聞 2016年8月19日

性的少数者がいて当たり前の雰囲気の小中学校でつくってほしいと訴える
佐々木掌子さん＝県庁で

金沢 小中教諭向け講演

金沢市近郊の市町の小中学校から担当教諭ら六十人が集まった人権教育推進会議が十八日、県庁であり、立教女学院短大の佐々木掌子専任講師（教育学）が、小中学校における多様な性の理解と対応をテーマに講演。同性愛者など性的少数者（LGBT）がいて当たり前の感覚を学校で育む大切さを訴えた。（福岡範行）

佐々木さんは、同性愛者であることを同級生に暴露され、転落死した一橋大法科大学院の男子学生＝当時（25）＝をめぐる訴訟を紹介し、本人の同意を得ずに性の情報を保護者ら他の人に伝える危険性を説明。

児童生徒ごとに異なる希望に沿って対応を考えることや、発育の過程で自分をどの性別だと思えるかなどが変化しても受け入れる柔軟さの重要性を解説した。

その上で、性的少数者の悩みは、自分の性のあり方そのものより、周囲の性的少数者への否定的な態度だと指摘。性的少数者の児童生徒を無理に特定する必要はなく、自分を男女のどちらだと考えるかや、どんな性別が恋愛対象になるかが一人一人組み合わせも強弱も違うという多様さを、授業などで前向きに取り上げることで問題の解決につながると訴えた。

性的少数者や支援者でつくる団体「レインボー金沢」によると、県内には高校生以下の当事者もいるが、学校内で打ち明けるのは難しいのが現実という。佐々木さんも、一橋大の事例について「裁判になって注目されたが、これまでも人知れず自殺した人はいっぱいいる」と強調。自分の性を考える思春期前から多様な性を前向きに学ぶことで「苦しむ人を減らせる」と語った。

県教委によると、人権教育推進会議での佐々木さんの講演は昨年的高校教諭向けに続き二回目。幼いころからの教育の大切さを考えて、今年は小中学校教諭を対象にした。

【リオ五輪】露のドーピング問題は「ソ連時代から続く悪習が原因」 旧ソ連諸国の記者「カンニング容認の国民性、いまも根付く」 産経新聞 2016年8月18日

【リオデジャネイロ＝佐々木正明】ロシアの国ぐるみのドーピング問題に波紋が広がる中、同国スポーツ界を熟知する旧ソ連出身の記者や関係者は、産経新聞の取材に対し、「ソ

連時代から続く悪習が原因だ」などと語った。一方、ロシア人記者は「締め出しは人権問題だ」と憤った。

旧ソ連諸国モルドバの通信社記者、セルゲイ・ドネツ氏（58）は「ロシアではスポーツと政治は切り離せない。ソ連時代から続く文化だ」と語った。ロシア・スポーツ省の存在はこの指摘を裏付けるものだとし、「ドーピングが行われたのは明らかに上からの指示だ。スポーツ省を解体しなければ、問題は解決されない」と話した。

さらにドネツ氏は「カンニングを容認するソ連時代からの国民性が今のロシアにも根付いている」とし、日常生活で不正があっても見て見ぬふりをする風潮がドーピング問題の遠因にあると解説した。

バルト三国のエストニアの選手団幹部は「ロシアは世界の強国でなければならないという意識が、ロシアのエリートの間にある」と指摘。こうしたエリートたちの勝利史上主義がドーピング問題を生む原因となったとの見方を示した。

さらに「エストニアは民主主義国として欧州の一員になったが、ロシアの影響が強いカザフスタンやベラルーシでも、ドーピングがはびこる土壌が残っている」と語った。

また、今は祖国を離れて活動しているロシア人ジャーナリストは「ソ連時代から、ロシアのスポーツ選手は活躍すれば一生が保証される報償を受け取ることができた。国内での競争も熾烈（しれつ）だ。選手たちはリスクを冒しても成果を得ようとする」と話す。若い選手が代表強化選手になれば、コーチや関係する役人も評価や報酬があがるため選手のドーピングを許してしまう、とも指摘した。

一方、露国営メディアのカメラマンは「スポーツは世界の融和を図るための手段。国際オリンピック委員会（IOC）のバッハ会長の判断は将来に禍根を残すだろう」と語った。

パラリンピックでロシア選手が閉め出されたことについて、別のロシア人記者は「パラリンピックは社会福祉や障害者の生活環境を改善し、希望をもたらすために行われている。なぜ、ハンディを負いながらも懸命に頑張ってきた選手たちを出場禁止にするのか」と怒りをあらわにした。

<となりの障害者> (上) バンド活動 俺にも夢はある 東京新聞 2016年8月19日



「俺は仲間が、仲間がほしい」。派手なメイクでソロ曲を歌う井上さん＝さいたま市中央区で

動きがのろいって蹴られた／こんなのもできないのって殴られた（略）どうせ何にも分からないって／障害があるだけでばか扱い（「いじめ」）

さいたま市中央区の小さなライブハウスに、叫ぶような歌声が響いた。口裂け女やピエロの化粧、法被やチャイナドレス姿。奇抜な衣装に身を包んだ二十人前後がステージに入り乱れる。バンド「スーパー猛毒ちんどん」の単独ライブ。全

員が障害者自立支援組織「虹の会」（同市桜区）の関係者だ。

中央に立つ歌舞伎の隈（くま）取り姿の男は、リーダーの井上正邦（34）。左手のまひと知的障害があり、虹の会では副会長を務めている。「いじめ」は、井上の実体験から生まれた曲だ。「学校は嫌なことが多かった」。

養護学校高等部二年のとき、実習に行った工場。朝から夕方まで誰とも話さず、ひたすらカレー粉を袋詰めした。もう一つの実習先だった虹の会では、他の障害者や職員と協力し合い、バザーを運営した。初めて見つけた居場所だった。

人前に立つのは苦手というが、ライブでは堂々としたトークで客を引き付ける。「練習は

緊張するけど、本番は勢いで。後ろのメンバーがいるから歌える」。歌詞を覚えられなくても客席になだれ込んだり、レオタード姿で踊ったり。メンバー全員に役割がある。「歌ってるときの俺はカッコいい」と胸を張る。

俺は黙ってカレーを詰める／笑うことも忘れた／俺は仲間が仲間がほしい／ふざけて笑える仲間が（「カレー」）

内容は暗いが、曲調は底抜けに明るい。「ポップな曲だからこそ歌詞が引き立つ」と、同じく副会長で、曲作りを担当する佐藤一成（50）。「歌は自己表現。本当に言いたいことじゃないと意味がない」と障害のあるメンバーから体験を聞き取っている。

高校時代はモヒカン刈りのパンク少年だった佐藤。一九八五年に埼玉大に入学し、障害者運動史を学んだ。同級生の誘いで通い始めた当時の同会は、全身の筋肉が萎縮していく筋ジストロフィーに侵されながら、同大近くで一人暮らしを始めた福嶋あき江（故人）を介助するボランティアの女子学生の集まりだった。

福嶋は介助を受けるだけの障害者ではなかった。施設から出て自立生活を目指す「闘う障害者」だった。初めて話し込んだ大学三年の夏。「会をただのボランティア団体じゃなく、運動にしたい」。熱っぽくそう語った福嶋は、その数日後、たんが詰まり二十九歳で急逝。「言い残されたような気分になった」。佐藤が同会を引っ張るようになったのはそれからだ。

死去の翌年に福嶋の人生をドラマ化したテレビ番組は、単純な「お涙ちょうだい」の物語だった。「本当は嫌な奴（やつ）も世間知らずな奴もいるのに『障害者は勇気をくれる。前向きだ』って。うそつけと思う」。バンドの奇抜さには、そんな障害者イメージへの反感が込められている。

十数年前に「みんなの遊び」として始まったバンド。今年はネット動画を見た音楽関係者から大阪のイベントに招かれるなど、着実に活動の幅を広げている。ライブを締めくくるとは、必ずこの曲だ。

一つ人より頭は弱いが／二つ不器用何のその（略）三つ見た目もいまいちだけど／四つ世渡りもうまかない（略）今が時だ逆襲だ／俺にだって夢はあふれている（「スーパー猛毒ちんどんの数え歌」）

「障害者なんていなくなればいい」。先月、相模原市で障害者十九人の命を奪った男の言葉が、多くの人を震撼（しんかん）させた。でもそれは、虹の会のメンバーにとって、目新しい言葉ではない。すでに学校で、職場で、さんざん爪はじきにされてきたから。「どんなに障害が重くても、地域で暮らすのが当たり前」を旗印に、親元や病院や施設を離れて街中のアパートで暮らす彼らは、決して「いなくならない」。その挑戦の軌跡を追った。
＝文中敬称略（谷岡聖史）

<となりの障害者> (中) 外の世界へ 自由に生きたい 東京新聞 2016年8月20日



大型映画館を訪れた工藤さん(右)と佐藤さん。2人ともホラーやサスペンス作品を好む＝県内で

小林厚士（33）は知的障害と軽い吃音（きつおん）がある。会話は苦手だ。その人生で最大の出来事を尋ねると、きっぱりと答えた。「家出です」。二〇〇五年の正月、通勤の定期券だけを手に久喜市の実家を飛び出して以来、さいたま市内のアパートで暮らしている。障害者自立支援組織「虹の会」事務所のすぐそばだ。

家出の二年前から、同会が運営するリサイクル店「にじ屋」の店員だった小林。だが父

親は、外で働くことに反対だった。○四年十二月、「もう行くな、って監禁された」。無断欠勤が一週間も続いた翌月二日。やっと「パンを買ってきて」と外出を許された。「にじ屋では友だちができたけど、このままだと終わりだ」。パン代の二百円をそっと自宅の郵便受けに戻し、そのまま駅に向かった。

虹の会副会長の佐藤一成（50）によると、二百円を見た父親は「俺が『お金を盗んじやいけない』と言ったことは守ってくれた」と泣き、「厚士が望むなら」とアパート暮らしを認めた。「虹の会より施設に入れた方が安心だと、お父さんなりに将来を心配していたんだろう」と推し量る。

それから十一年半。出勤前には近くの事務所に仲間と集まるのが小林の日課だ。「そこで佐藤さんが作った朝ご飯をみんなと食べるのが、一番楽しい」

小林と同じアパートには、全身の筋肉が動かなくなる進行性の難病、筋ジストロフィーの工藤伸一（51）も暮らしている。

わずかに動く右手でパソコンを操り、特殊な機器を使って呼吸の回数や長さでエアコン、部屋の照明などを自分で動かす。寝室の隣には、工藤の指示でトイレや入浴、食事などを手助けする男性介助者が二十四時間体制で待機する。介助者を派遣する虹の会で会長を務める工藤は、最古参の一人だ。

同会は一九八二（昭和五十七）年に発足。当初は同じ病気の福嶋あき江（故人）の支援団体だった。筋ジス患者の退院は不可能だといわれていた当時、募金を集めて一年余り米国の障害者福祉を視察。帰国後は旧浦和市で自立生活を始め、話題の人となっていた。

その頃、工藤は蓮田市の筋ジス病棟にいた。「なぜ他人の力まで使って外で暮らすのか」。福嶋を否定する半面、迷いもあった。

入院生活は九歳から。数年後には車いす生活となり、十九歳で電動車いすに。若い患者が多い病棟は「学生寮のような雰囲気」。こっそり成人雑誌を買ったり酒を飲んだり、一種の「青春」があった。だが苦痛だったのは、自由にトイレに行けないこと。趣味の油絵も決まった時間だけ。日常すべてに制約があった。

八八年、病棟の交流会で同会のボランティアと知り合ったことから、埼玉大四年だった佐藤が定期的に会いに来るようになり、気持ちが動いた。「病院にいればそれなりに生活できるが、ずっと環境は変わらない。だったら死んでもいい。思い切って外に出たい」。翌年七月、二十四歳で現在のアパートに移った。

病気は現在も進行中だ。自発呼吸が弱まり○二年に気管を切開。旅行中に呼吸器のバッテリーが切れ、冷や汗をかいたこともある。それでも工藤は、佐藤らとの映画館通いを毎週続けている。「(生命の) 保障はなくても自分の責任で、自分の意思で決められる。それだけで自由を感じる」。この夏、工藤の一人暮らしは二十八年目に突入した。＝文中敬称略（谷岡聖史）

<となりの障害者> (下) 親子の距離 それぞれに自立 東京新聞 2016年8月21日
アパートの自室でカメラに笑顔を見せる市丸さん（左）と同居人の小倉さん（中）、久保さんの3人＝さいたま市桜区で



「ねえねえ野球好き？ お酒は飲む？ どこ住んでる？」。さいたま市桜区にある障害者自立支援組織「虹の会」を取材に訪れると、決まって市丸敦啓（39）の質問攻めに遭う。顔をくしゃくしゃにして笑い、人懐っこい性格。今でこそ同会のマスコットの存在だが、十年前は問題児だった。

北本市の実家から同会のリサイクル店

「にじ屋」に通い始めたのは二〇〇六年三月。「すぐに『逆ギレ』していた」と専従職員の外口孝治（52）。常に目は三角につり上がり、カッターナイフを持ち出したことも。二週間の実習の末、他の障害者全員に「おまえなんかとやりたくない」と拒否されるほど協調性がなかった。仕事後に映画に誘っても「行きたくない」と家路を急ぐような日々が続いた。

市丸が変身したきっかけの一つが、〇九年四月の「脱腸事件」。同会の旅行中に鼠径（そけい）ヘルニアを発症し、外口は北本市の病院ではなく、にじ屋の近くで入院させるよう市丸の家族に勧めた。市丸は「俺手術したんだよ。みんなが見舞いに来てくれた」とうれしそうに振り返る。

一一年三月にはこんなことも起きた。知的障害者が起こした刑事事件の裁判の傍聴に行くと、柵の向こう側の法廷に現れた被告人を見て、市丸は「あっちに行きたくない。みんなと働けなくなる」と外口に泣きついた。いつの間にか、虹の会は大切な居場所になっていた。一二年四月、実家を出て暮らし始めた。

市丸は現在、掃除や食事作りに専従職員の助けを借り、小倉章義（36）、久保魁（かい）（24）と同じ部屋に住んでいる。「小倉はいびきがうるさい。魁には一回かまれた。でも、みんなで住むのはいい感じです」。知的障害者が三人。毎日騒動を起こしながら、同居生活を楽しんでいる。

母親（68）に言わせれば「敦啓は変わったというより、元の明るい性格に戻った」。以前に働いていた母親の知人の雑貨店では、客に親しく話し掛けるたび、上司に怒られた。「自分を受け入れてもらえず、イライラが募っていた」

抱っこしても体を寄せてこないなど、赤ん坊のころから違和感があった。小学校入学前に「自閉傾向」と診断されたが、地域から断絶するのはおかしいと、小中学校は養護学級を断り普通学級へ。中学では柔道の絞め技の練習台になるなど、いじめも受けた。

障害者の親として実感したのが「日本社会は産んだ者に責任を強く求める」こと。学校や病院では必ず「普通分娩（ぶんべん）でしたか」と質問される。市丸一人でコンビニに行けば近所の人に「なぜ親がついて行かない」と聞かれる。「踏ん張らなきゃ」。いつしか抱え込んでいた。

初めて同会を訪ねると障害のことは細かく聞かれず、「とにかく大事なのは本人の意思」とだけ言われ、驚いた。親が運営に関与しないのが同会の基本方針。にじ屋への出入りも禁止と徹底している。外口は「反抗期などで自然に離れていくのが親と子。でも障害があると同じ距離のまま大人になり、手放したくても抱え込んでしまう。親にも子にも自分の人生を生きてほしいから」と説明する。

市丸だけでなく母親も変わった。現在、趣味の洋裁や読書で忙しい日々だ。「障害者の親だからこそ価値観が変わり、人生の幅が広がった」と振り返る余裕も生まれた。市丸の帰省は盆と正月だけ。実家の部屋には、母親の織り機が鎮座している。＝文中敬称略（谷岡聖史）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行